

タイトル

背中を押した一言 ～4打席連続三振からの逆転劇～

エピソード内容

私が小学6年生の時のお話です。

当時私は北海道清里町にある野球少年団「清里ジャガーズ」に所属していました。

小学4年生から野球を始めて、6年生になって初めてレギュラーの座を掴みました。

ポジションはライトで、打順は8番。

いわゆる「ライパチ」で、チームの中では影が薄い存在でした。私以外の同級生8人は低学年の時から野球を始めていたので、同級生の中では私が一番下手でした。

小学6年の夏。清里ジャガーズは予選を勝ち進み、「高円宮賜杯全日本学童軟式野球大会」の全道大会に出場することができました。ジャガーズは私以外の同級生のポテンシャルが高く、下馬評では「優勝候補」と期待されていました。待ちに待った1回戦、私は人生で最も心拍数が高いと言っても過言ではないほどに緊張していました。しかし、私の緊張とは裏腹にチームは1回表に7点を先取し、大きくリードを広げることができました。

1回裏、相手バッターの打球がライト線を襲うゴロ。私は必死に追いかけて、捕球態勢を取りました。しかし無情にもボールはグラブをかすめて後方に転がっていきました。記録はエラー。心臓の鼓動はますます高まります。

次の打者の打球。ライトにフライが飛んできました。平凡なフライ。前進して落下地点に入る。緊張で固まった私はまたも落球してしまいました。私の二つのエラーがきっかけとなり、そこから失点を重ね、なんと1回裏に8失点を喫していました。

「守備でみんなの足を引っ張ってしまった。バッティングで取り返そう。」

そう思った私の気持ちは空回りし、その試合は四打席連続三振。チャンスで打席が回ってきても三振。味方チームの仲間もため息をつきました。結局試合は7対8でジャガーズの敗北に終わりました。私のミスが重なり、優勝候補だったチームは初戦敗退。

私はこう感じました。

「野球は小学生までにしよう。もうチームのみんなに迷惑をかけたくない。」

そう思い一人でうつむき落ち込んでいると、同級生のみんなが私のところにやってきました。

「そんな落ち込むなって！中学校でも一緒に野球やろうな。」

私のミスが原因で試合に負けてしまったのに、そんな優しい言葉をかけてくれました。

「今頑張らずにいつ頑張るんだ。自分を変えるのは今がチャンスだ。」

そう決意した私は小学 6 年の秋と冬、人生で一番努力しました。雪が降る中でも毎日の走り込みや素振りを重ね、自分自身と向き合い自信をつけていきました。

その結果、私は中学でも野球を続け、野球部の主将や 4 番打者を務めるまでに成長しました。

高校でも野球を続け、「第 84 回選抜高等学校野球大会」いわゆる「甲子園」に出場することができました。一番野球が下手だった私が甲子園に出場することができたんです。

もしも私が小 6 で野球を諦めていたら、中学や高校でどんな生活を過ごしていたのか、想像もできません。

あの時、私の背中を押してくれた同級生たちに送りたい言葉。

「あの時落ち込んでいる私の背中を押してくれてありがとう。みんなのおかげで今の私があります。」

応援アワードへの応募理由・意気込み

旭川市のフリーペーパー「ライナー」の記事を読み、今回の応援アワードを知りました。私は友人から「順哉みたいに失敗を恐れずに行動できるような人になりたいよ」と言われることがあります。大学卒業後アメリカに渡りハーバード大学で日本語教員を務めたり、25 歳で英会話教室を起業したりする私を見てそう言ってくれますが、昔から主体的に行動できたわけではありませんでした。私が変われた理由を話すときのエピソードをもっと多くの方に知ってもらいたいと思い、今回応募することを決心しました。